

青年期における自己概念と逸脱

—若年受刑者の自己概念と社会的絆—

Self Concept and Deviance in Youth

—Self Concept and Social Bond in Young Inmates—

弘前大学保健管理センター

遠 山 宜 哉

愛光女子学園

中 島 富美子

I 問 題

II 方 法

1 対 象

2 手続き

III 結果と考察

1 相関関係の分析

2 上位下位分析

IV 要 約

I 問 題

自分自身をどのようなものとして認知し評価し規定するかということは、その人間の行動を大きく左右する。梶田(1980)は、人の存在様式に三つの基本的なあり方があるとして、「(1)自己意識を全く欠いた状態(乳幼児、睡眠中、等)、(2)即自的自己意識を持った状態(幼児期・児童期、成人の場合であるなら何かに多少とも没頭している場合、等)、(3)対自的自己意識をもった状態(青年期以降、特に自省、煩悶、自己洞察、等の場合に顕著)」を区別している。このうち3番目の「対自的自己意識」における自己、つまり自己の対象ないし客体としての側面は、ふつう「自己概念(self concept)」あるいは「自己像(self-image)」と呼ばれる。この自己概念は、青年期以降、人の行動に重要な意味を持つようになる。自己概念が統合された形をなすまでの過程は、エリクソンが「同一性の達成と同一性の拡散」という言葉で表現した発達課題の克服の過程である。それがその後も適応上に一貫して重要な意義をもつ点については、ロジャースが繰り返し指摘してきたところである。また、象徴的相互作用論では、他者からの期待を受け止める客我(Me)とそれを主体的に取り込む主我(I)の相互作用によって自我が成立する過程を論じ、それが人間の社会性の基本であると考えられる。他者からの期待を受け止めることによって成立する自己像、それを受けて自分で自分の現実

を受け入れ規定する形でできる自己像，さらに将来に対して理想を投げ掛ける意味での自己像などさまざまな側面があり，それぞれが行動の主體的決定因として重要な意味を持つのである。

したがって，犯罪や非行などの逸脱行動においても，自己概念は重要な要因である。アイデンティティ論の展開の中では，「否定的同一性」ないし「対抗同一性」といった概念化がなされている（福島，1979，鐘ら，1984）。これは，否定されるべきものとしての同一性を持ったり，少数者の側に立って多数者のもつ価値に対抗する形で同一性を形成するものである。特に後者では同一化を通じて自ら主體的に対抗的価値を選択し，それを自己概念にとりこむことによって犯・非行に関わるという機制を認めている。ただ，否定的同一性ないし対抗的同一性を確立したものが必ずしも犯・非行のような法規範に抵触する行動ばかりをとるわけではないし，逆にそうした同一性が確立していなければ犯・非行行動をとらないというわけでもない。同一性の拡散状態や同一性の葛藤状態が犯・非行の背景にあることも少なくないし，「肯定的同一性」が確立していても逸脱は生じるという点には注意をしておかなければならない。福島（1972）は同一性の拡散・葛藤状態における犯罪を「自我同一性危機犯罪」となづけて，他から区別することを提唱している。一方，象徴的相互作用論の系譜に位置づけられる逸脱論としては，レイベリング理論がある。犯罪・非行におけるレイベリングは西村（1982）の整理によると，「1他者が貼るラベル，2自分が自分に貼るラベル，3他者が自分にどういうラベルを貼るかを推測する」，という三つの側面を区別することができる。レイベリング理論では，ラベルの虚構性・相対性を強調するためにこのうちの1の側面に重点を置いてきたきらいがあるが，犯罪者・非行少年の自己概念という意味からすると2と3の側面が大きな意味を持つ。両者は厳密に区別しがたいものであり，他者によって自分がどのようなラベルを貼られるかを推測し，それに応じたラベルを自分自身に貼ることで自己概念は大きく決定づけられると考えることができる。犯罪者・非行者とラベル貼りをされているのではないかという推測をし，実際に自分は犯罪者であり非行少年であるという自己概念が生じたというだけで，それが犯・非行への傾斜を強める方向にばかり作用するかどうかは，必ずしも無前提で断定できることではない。ラベルを貼られたことを意識しかえって奮起し更生することもあるし，断酒会の活動のようにアルコール依存者であるという自覚が，社会復帰への積極的な行動の前提となる場合もあるからである（西村，1982，平尾，1984）。しかし，犯・非行の過程において自己概念のこのような側面が，程度の差はあれ常に関与していることを想定している点において，あるいは同一化といった多少なりとも主體的な関与だけでなく，否応なくラベル貼りをされることへの受動的な対応の側面を捉えている点において，レイベリング理論はアイデンティティ論にない視点を提供してくれる。ただし，レイベリングだけですべてを包括的に説明しようと試みたものではないだけに，どこまでをそれで説明できるのか具体的に示すことはかなり困難であった。

犯罪社会学ないし犯罪社会心理学における社会統制理論の流れの中では，レックリスが直接的に「自己概念」を取り上げ，調査によって仮説を検証している。レックリスらの調査では，良好な自己概念は非行に対する「絶縁体」になっているとの結論が得られた（Reckless, W. et al, 1956）。しかし，その後は，自己概念と非行の間には必ずしも明らかな関係があるわけではないことが分かっており，研究方法に対する批判も多く，「自己概念」という形では論じられなくなっている（Orcutt, J. D. 1970, Vold, G. B. et al, 1985）。これは「自己概念」という概念そのものが，す

で述べたようにかなり多面的で多義的であることが災いしていると考えられる。ただ、このような初期の統制理論は、その後のハーシの社会的絆理論やマッツァの中和理論に対して基本的な発想を提供していると考えられることができる。つまり、少年非行は何か特殊な生物学的・心理学的・社会学的な要因によって生じるわけではない、という発想である。ハーシは慣習的社会への絆は非行少年も持っており、それが非行に対して抑制的な働きをするが、その働きが弱まった場合に非行が生じると考える。社会的絆にはアタッチメント（愛着）、コミットメント、インヴォルブメント（包絡）、信念という4つの要素があるとされる。この4要素は、現実場面に適用すると互いに区別するのはかなり困難だが、慣習的社会に対する結び付き方が多様であることを述べている点で示唆に富んでいる。ただ、ハーシは自説の検証にあたって鑑別所や少年院に収容されるような程度の進んだ非行少年を扱っていないことに限界があるとされるし、また、あくまで少年の研究であって成人を考慮に入れていないという限界があった（Vold, G. B. et al., 1985）。

以上のような問題背景を踏まえて、われわれは次のような調査を企てた。①非行少年ではなく若年成人を対象とし、そこでも自己概念や社会的絆が犯罪性と結び付いているかどうかを確かめること、②刑務所に収容されるまでに至った者でも、相対的に犯罪性の進んだ者とそうでない者とを比べれば、自己概念や社会的絆の強さが異なることを確かめること、③自己概念については、「根深い犯罪者として自己を捉える程度」という点に意味を限定する、つまり、犯罪者としての自己レイベリングの側面に着目する、以上3点を狙いとする調査である。基本的な仮説は、「犯罪者の犯罪性、犯罪者としての自己概念、社会的絆、の3つの側面は相互に影響を与え合い、相互に原因となり結果となっていると考えられるので、犯罪者としての自己レイベリングと犯罪性は互いに影響しながら深まり、それに社会的絆の弱体化も伴う」というものである。

Ⅱ 方 法

1 対 象

調査の対象者は東京矯正管区の分類センターに収容された若年受刑者である。この分類センターに収容されている者は、①16歳以上26歳までの男子受刑者であり、②刑務所初入で、③収容時に実刑期が1年以上ある。このうち、調査実施時に20歳に達していなかった者は、未成年者として異質の生活空間を持っていると考え調査の対象から排除した。調査対象となったのは165名。これを10～30名の小集団の形として質問紙調査を行った。データは1989年の秋に得たものである。なお、こうして得たデータのうち、矯正協会式的能力検査（後述）で「IQ相当値」が70未満の者は除き、142のデータを分析の対象とした。

2 手続き

B5版の用紙で11枚にわたる質問紙を用いた調査を行った。このうち、今回のデータとするのは、受刑者の自己概念、とくに犯罪者としての自己の認知の側面を調べた項目と、生活の中で大切にしているものと、およびそれに費やしたエネルギーを調べた項目の二つである。また、質問紙によって得られるデータの他に、分類センターが日常業務として行っている各種検査のうち、矯正協会

式的能力検査 (CAPAS) の「IQ 相当値」と犯罪性進捗指数 (C.Q.) を用いた。

犯罪者としての自己概念：自分が親・友達・上司・警察官からそれぞれどんな評価を受けていると思うかを評定するよう求めた質問の後で、「あなた自身は、あなたがこれまで問題を起こしてきた自分自身について、どう考えていますか。9 個の○のうち一つに印をつけて教えてください」と尋ね、6 個のステートメントに対して「そう思わない」から「そう思う」までの 9 件法で回答を求めた。犯罪者としての自己概念に関わるステートメントは、このうち「自分でも何をしでかすかわからないところがある」「根っからのワルだと思う」「自分の力だけでは立ち直れないような気がする」の 3 つである。この 3 つの評価点を単純加算したものが自己概念の得点となる。取り得る値は -12~12 であり、得点が高いほど、自分の意思決定力を超えたもので自分が犯罪者として決定されてしまっているという感覚を反映していると仮定する。したがって、自ら主体的に犯罪者として自己規定したという感覚とは異なる。しかし、自己概念の一側面であることには違いない。

大切にしているものごとと費やしたエネルギーについての考え：質問は「あなたが大切にしているのは何ですか。思いついた順に具体的に 10 あげてください。それから、その大切なもののためにどのくらい努力してきたかを考えて、○の中に印をつけてください。」というものである。10 の欄に自由記述することを求め、さらに、「努力していない」から「努力した」までを 8 件としてそのどこかにチェックすることを求めている。この指標は、ハーシの言う四つの絆のうち、アタッチメントおよびコミットメントに相当するものであり、大切にしているものごとの数が前者を、それに費やしたエネルギー量が後者を反映すると一応は考えられるが、必ずしも明確な区別はできない。ただ、挙げられたものごとの数が多いほど、また注がれたエネルギーの量が多いほど、社会的絆が強いと考えられる。なお、指標としては、「大切」として挙げられた個数（以下「大切個数」と、そのおのおのに費やしたエネルギーの評価（-3.5~3.5 まで 1 ずつ 8 段階）を乗じたもの（以下「大切総量」、取り得る値は -35~35）をとることとした。

犯罪性進捗指数 (C.Q.)：犯罪者の犯罪性を一元的な数値で表し、受刑者の分類に役立てるために開発されたものであり、操作的に定義できる 8 の指標についてそれぞれ 5 段階で評価し、それをそれぞれに重み付けをした上で加算し定数を減じたものである。8 の指標とは、「生活資源・職業生活」「反社会的集団所属性」「薬物依存度・かけ事耽溺度」「犯歴期間」「再犯期間」「処分歴」「犯罪の動機・原因」「犯行手口」である。これは数値が大きいほど、犯罪性が進んでいるとされる。本研究でも、これを犯罪性の指標として扱った（新田ら（1977）を参照）。

矯正協会式能力検査 (CAPAS)：受刑者の全般的な能力を測定して作業指定をはじめとする処遇に役立てるために矯正協会が開発している一連の検査シリーズの一部であり、シリーズのⅠおよびⅡが従来の知能検査にもっとも近い役割を果たしている。ⅠとⅡの二つの成績を合わせて評価し偏差値で示すものであるが、IQ 値に変換して「IQ 相当値」としても用いている。従来の田研式田中ビネー知能検査 (B) との相関は $r=0.774$ である。本研究ではこの値を知能を評価したものとして採用した（日本矯正協会、1988）。

なお、「受刑者の将来展望」のデータ、および「重要な他者からの評価についての受刑者の認知」のデータもこの質問紙によって得ることができたが、これについてはすでに分析を行い発表済みである（Tohyama, N. & Nakajima, F., 1989）。

Ⅲ 結果と考察

1 相関関係の分析

CQ値、自己概念、「大切個数」、「大切総量」の各指標の他に「IQ相当値」（以下「IQ」）を取り上げて相関係数を求めた結果を、表1の右上半分に示した。Nは142である。「(否定的な)自己概念」とCQ値には1%水準で有意な相関関係

表1. 相関分析の結果

	C. Q.	自己概念	大切数	大切総量	I. Q.
C. Q.		0.285 **	-0.080	-0.195 *	-0.091
自己概念	0.248 **		-0.195 *	-0.066	-0.184 *
大切数	0.025	-0.155		0.445 **	0.304 **
大切総量	-0.150	-0.053	0.405 **		-0.009
I. Q.	-0.069	-0.153	0.182	-0.043	

(右上：N=142，左下：N=112，*：p<.05，**：p<.01)

が確認でき、犯罪者としての自己概念が根強いほど犯罪性も高いという関係が明らかになった。また、自己概念と「大切数」、CQ値と「大切総量」の間にも、それぞれ5%水準の有意な負の相関関係が認められた。

IQ値にも注目してみると、「大切数」との間に1%水準の、自己概念との間には5%水準の有意な相関が認められる。「IQ値が高い人ほど大切数が多い」というのは、10の空欄に自由記述により表現させる今回の方法では、ある程度予想されることであつた。IQの高い者ほど表現力が豊かで、自分の考えをより自由に表現できる可能性が高いからである。一方、「IQ値が低い人ほど犯罪者としての根深い自己規定が見られる」という傾向があり、しかも客観的な指標であるIQとCQとの間には相関が見られないことから、IQ値の低い者はCQ値の高低に関わりなく、IQの高い者より否定的な自己概念をもつ傾向があると考えられる。したがって、その意味でも、IQ値の低さが大切数の少なさに反映している可能性がある。

質問紙調査の方法として、自由記述を求める箇所では表現力の低い者にバイアスがかかった可能性がある。さらにIQが80未満の者のデータをすべて除いた、112のデータで相関分析を行った結果が、表1の左下半分である。統計的に見て有意なのは、「大切数」と「大切総量」との関係以外では、CQと自己概念との関係に1%水準で認められるだけになっている。「大切数」は自己概念との間に低いながら相関をもつが、IQとの間にもそれ以上の相関があるので、上述のような方法上の問題の可能性は依然排除できない。他方、「大切総量」はCQとの関係が有意ではないものの認められ、しかもIQとの相関は低いままである。このことから、IQの相対的に低い者は「大切数」が少なくなりがちであるが、その分、個々の「大切なものごと」に対して費やしたエネルギー量の評定が相対的に高い(甘い)ために、大切総量としてみるとIQとの相関が明確なものではなくなるという考えもできることになる。

2 上位下位分析

I Q値を80以上に絞ったデータ112のうち、自己概念の上位下位それぞれ27%, 30ずつとって良好群と不良群をつくり、各々の指標について平均値の差の検定を行ったのが表2である。ここでも5%で有意な差が認められた

表2. 上位下位分析の結果

		自己概念	年 齢	I Q	C Q	大切数	大切総量
良 好	平均	-11.77	23.13	91.73	43.34	7.40	9.07
	S D	0.42	1.38	7.55	9.69	2.40	11.85
不 良	平均	0.00	22.67	89.67	48.17	6.47	6.63
	S D	2.87	1.68	6.69	9.78	2.59	9.34
t	値	21.80	-1.15	-1.10	1.89	-1.42	-0.87
有 意 差		p<.01	N.S.	N.S.	p<.05	N.S.	N.S.

のはC Qにおいてのみである。ただし、「大切数」「大切総量」においても共に、仮説を支持する方向の結果が得られている。

つぎに、この両群において「大切にしているものごと」の内容がどのように異なるかを、質的な側面から分析した。まず、すべての反応を書き出して、そこからK J法の要領で適当なカテゴリーの方法を決め、つぎにそのカテゴリーに該当する反応を各群30名ずつのうちおのおの何名が出しているかを調べた。個々の反応を子細にみると、同じ人が「大切」として挙げたものには抽象度の異なるものが含まれており、「父親・母親」「家族」「人間関係」などといった反応をそれぞれ独立対等なものとして扱うことはできないからである。このようにして行った

表3. 内容分析の結果

	良好群	不良群	χ^2	有意水準
友 だ ち	24	24	—	N.S.
親, 父親・母親	23	20	0.739	N.S.
自分自身・ 自分の命/健康/考え	17	17	—	N.S.
恋 人	15	12	0.606	N.S.
仕事・仕事の人間関係	15	7	4.593	p<.05
金 銭	14	11	0.617	N.S.
兄弟・姉妹	12	13	0.001	N.S.
クルマ・バイク	11	8	0.693	N.S.

内容分析の結果が表3である。良好群不良群の差は χ^2 検定で統計的な有意差の有無を確かめた。これによると、有意な差を見いだすことができたのは「仕事」に関するものだけであった。

つまり、「自己概念の良好な者は不良な者より、仕事や仕事をめぐる人間関係を重視している」。仕事を介した社会的絆が強いとも解釈できるであろう。無職ないし頻回転職の者が多い中で、仕事を中心とした生活空間に投資（コミット）しているということが反映されているわけであり、社会的絆が強いだけに今後は、相対的に見て犯罪傾向が深まりにくいと考えられるし、また逆に、犯罪性がさほど進んでいないために社会的な絆が保たれているとも言えよう。この点で、因果関係の分析は、今後の研究に待たなければならないことは明らかである。

今回の調査の対象は、受刑者の中では比較的犯罪性に関きが少ない集団であった。したがって、以上のような結果も、もし「非受刑者」対「受刑者」、あるいはもっと犯罪性に関きの大きい集団相互の比較をすれば、結果はより明確な形で現れるだろうことが予想できる。

Ⅳ 要 約

①犯罪性（CQ）が深まれば犯罪者としての自己概念も根深いものとなり、同時に社会的絆も弱まるという随伴関係が見られると仮定し、それが成人を過ぎた、しかも受刑中の男子若年者においても認められるかどうかを調べた。社会的絆としては、ハーシの言う「コミットメント」に近い指標として、生活の中で「大切にしているものごとの数（大切に数）」と「それぞれに費やしたエネルギーの量（大切に総量）」をとった。142のデータで4指標の相関をとると、CQと自己概念、CQと大切に総量、自己概念と大切に数、の間にそれぞれ統計的に有意な相関関係が認められた。しかし、CQと大切に数、自己概念と大切に量の間には有意な相関がなかった。ただし、方向としては仮説を支持する方向の結果である。

②IQ値をとると、これが自己概念や大切に数と有意な相関を示すことが分かった。IQ値で代表されるような、表現力や自己批判力などの要素が結果に反映されている恐れは排除できない。IQ値をさらに制限してみると、確かに有意な相関関係が見られなくなったが、IQ値の高い人のデータをさらに増やして検証したときに同じ結果が得られるかどうかを確かめる必要がある。

③自己概念得点の上位下位それぞれ27%をとって不良群良好群とし、各指標を比べると、有意な差が見られたのは犯罪性だけだった。自己概念と犯罪性は一貫して強い結び付きがあることが分かる。しかし、「大切に数」「大切に総量」のいずれも仮説を支持する方向で差が見られた。

④自己概念の良好群不良群が挙げた「大切なものごと」を内容分析すると、有意な差が見られたのは「仕事および仕事をめぐる人間関係」について言及する人の数においてだけであった。我々の調査対象においては、近親者の人間関係や「事物」についてよりも、「仕事」へのコミットが強いかどうか社会的絆の大きな違いを反映するということが分かった。

⑤「大切なものごと」を挙げるという課題は、かなり高い言語的表現能力が要求されるものであったことが方法上の難点であった。しかし、比較的等質で似た条件に置かれた今回の調査対象者においても、仮説支持の方向で結果が得られたことから、それぞれの指標でより大きな差が現れるような異質な集団を比較すれば、結果はより明確な形で現れるだろう。もし、それが確かめられれば、社会的絆理論の傍証になろうし、自己概念についてもそれを十分に限定的な意味に用いれば、犯罪性との関係があることを明らかにすることができるだろう。

参考文献・引用文献

- 遠藤辰雄, 1981, 自己と自我, 遠藤辰雄編, 『アイデンティティの心理学』, ナカニシヤ出版
福島章, 1972, アイデンティティ危機と犯罪, 犯罪学雑誌, 38, 200-208.
福島章, 1979, 『対抗同一性』, 金剛出版

- 平尾靖, 1984, 『新版 非行心理の探求』, 大成出版社
- Hirschi, T., 1969, *Causes of Delinquency*, University of California Press, Berkeley.
- 梶田毅一, 1980, 『自己意識の心理学』, 東京大学出版会
- 日本矯正協会, 1988, 『キャパス I・II マニュアル』, 日本矯正協会
- 西村春夫, 1982, 犯罪理論 (三) 社会心理学的理論, 菊田幸一・西村春夫編『犯罪・非行と人間社会—犯罪学ハンドブッカー』, 評論社
- 新田健一・鶴元春・大山勝典・藤薮賢治・津崎秀樹・佐々木昂・佐藤美知子・廣中博, 1977, 非行性・犯罪性
進捗判定の手引き
- Orcutt, J. D., 1970, Self-Concept and Insulation against Delinquency: Some Critical Notes, *Sociological Quarterly*, 12, 381-390.
- Reckless, W., Dinitz, S. & Murray, E., 1956, Self Concept as an Insulator Against Delinquency, *American Sociological Review*, 21, 744-756.
- 佐藤郁哉, 1984, アメリカにおける犯罪研究の動向—社会コントロールモデルとその問題点, 石田幸平・武井
槇次編『犯罪心理学—青少年犯罪者の生活空間と類型論』第6章, pp. 163-182.
- 鍵幹八郎・山本力・宮下一博編, 1984, 『自我同一性研究の展望』, ナカニシヤ出版
- Tohyama, N. & Nakajima, F., 1989, Self-Labeling and Time Perspective in Young Inmates *Tohoku Psychologica Folia*, 48, 33-41.
- Vold, G. B. & Bernard, T. J., 1985, *Theoretical Criminology*. 3rd ed., Oxford Univ. Press.
- 平野龍一・岩井弘融監訳『犯罪学—理論的考察—』東京大学出版会